

二条大麦「ミカモゴールドン」の収穫法について

1. 試験のねらい

昭和62年度に本県の奨励品種に採用された二条大麦「ミカモゴールドン」の自脱型コンバインによる収穫法について、刈取時期、扱胴回転数を変えて検討した。

2. 試験方法

(1) 刈取時期を早刈（穂首曲がり程度1割）、適期刈（同9割）、遅刈（同10割）の3段階と、脱穀部の扱胴回転数を稲用標準（目標扱胴回転数450rpm）、稲用の93%（同419rpm）、稲用の85%（同383rpm）の3段階を組合せて行った。

(2) 供試機 I式HL2200

使用条件	ギア位置	副一中（標準）	作業速度	稲用標準	0.45~0.46m/s
		主-6		稲用93%	0.4m/s
				稲用85%	0.35~0.38m/s

(3) 供試作物条件及び試験月日を表1、表2に示した。

(4) 選別調査を各区ごと2反復サンプル採取を行い、損傷粒は食糧事務所の二条大麦被害粒基準に沿って行った。

3. 結果の概要

(1) 選別調査結果を図1に示した。

1) 損傷粒の発生は適期刈区で少なく、また、全体的に扱き胴回転数を下げると損傷粒の発生も減少した。

損傷粒の発生程度は4.0~8.7%で、「はるな二条」（6.2~9.7%の発生）と同程度かやや低い発生量であった。

2) 穂軸附着粒・穂切粒の発生は、扱き胴回転数を下げると増加した。全体的には11.9~21.3%の発生があり「はるな二条」（20~34%の発生）より少ないが、アズマゴールドン（10~15%の発生）より多く、やや穂軸が取れにくかった。

3) 適期刈区のを稲用-10%の扱胴回転数で収穫し、循環型乾燥機で乾燥した結果、損傷粒は6.7%（収穫時に比べ1.8~2.7%の増加と推測される）、穂軸附着粒・穂切粒は11.9%（収穫時に比べ4.5~9.4%の減少と推測される）であった。

(2) 発芽勢発芽率調査を表3に示した。

発芽勢は各区とも95%以上で問題なかった。

4. 成果の要約

「ミカモゴールドン」は本県の自脱型コンバインによる収穫指針（圃場全体の8~9割の穂首が曲がった時期に稲用の扱き胴回転数より10%程度低い回転数で収穫する）で収穫するのが適当と思われた。

なお、「ミカモゴールドン」はやや穂軸が取れにくい品種で、収穫乾燥後精米機や脱穀機で調製する必要があると考えられた。

（担当者 作物部 鈴木正行）

表1 供試作物条件(成熟期調査)

条間 cm	稈長 cm	穂長 cm	有効穂数 本/m ²	遅穂数 本/m ²	被害穂数 本/m ²	全刈収量(整粒) Kg/10a
30.0	91.3	4.9	942.7	28.0	2.7	390.6

表2 供試作物条件(試験月日と穂首曲り程度)

刈取期 区名	月日	穀粒 水分	穂首曲り程度割合(%)						圃場全体の観察に よる穂首曲り割合の割合
			I	II	III	IV	V	VI	
早刈	6.6	27.7	88.9	10.8	0.3				約1割
適期刈	6.8	14.6	9.5	17.6	40.4	28.3	4.2		約9割
遅刈	6.10	19.9	6.1	10.2	21.7	51.4	9.6	1.0	約10割

注1 穂首曲り程度 I...0°~30°、II...30°~60°、III...60°~90°、IV...90°~120°
V...120°~150°、VI...150°~180°

注2 8~9日にかけて降雨があったため遅刈区の方が、穀粒水分が高かった。

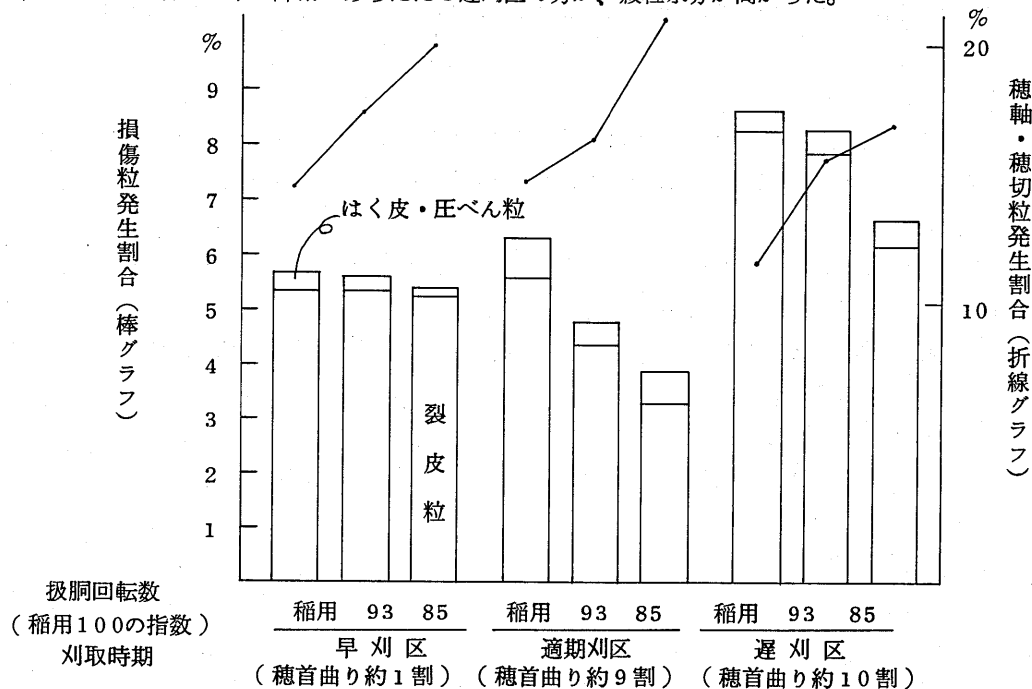


図-1 選別調査結果

表-3 発芽勢・発芽率調査

区 項目	早刈			適期刈			遅刈			適期刈 稲用-10% 収穫・乾燥後
	稲用	93	85	稲用	93	85	稲用	93	85	
発芽勢	97.5	98.3	97.7	99.2	96.8	99.5	99.8	99.2	99.0	99.7
発芽率	98.4	98.8	98.0	99.7	99.0	99.5	99.8	99.8	99.0	99.8